



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3277 号 2016.9.25 発行

成人した子供の犯罪に、親はどこまで責任を負うべきか？ 産経新聞 2016年9月25日



息子の高畑裕太氏の件で会見冒頭、頭を下げる高畑淳子さん(右)＝8月26日、東京都千代田区(三尾郁恵撮影)

俳優の高畑裕太さん(23)が8月に強姦致傷容疑で逮捕され(後に不起訴、釈放)、母で女優の淳子さん(61)が謝罪会見を開いたことをきっかけに、「親の責任」に注目が集まっている。芸能界では以前から、親が子供の不祥事で謝罪や仕事の自粛を余儀なくされてきたが、成人した子供に親はどこまで責任を負うべきなのか。ジャーナ

リストの木村太郎氏と弁護士の大沢孝征氏に聞いた。(三品貴志)



著名人には覚悟が必要 ジャーナリスト・木村太郎氏

――親は成人した子供に対し、責任を負うべきか

「一般論として、子供は親を見て育ち、人格を形成していくものだ。子供が何歳になろうと、何かしら親の影響を受けていることは否定しきれない。法的な責任とは別として、親はいつまでも、子供に対する道義的な責任はあると思う。特に公人や著名人、芸能人の場合、子供に対する責任を追及されることはやむを得ないと考える」

――芸能人の場合、子供の問題の責任を取り、親が自身の仕事を自粛する

ことが多い

「僕自身、仮にそういった立場に立たされたら、表に出る仕事は辞めるだろう。僕は芸能人ではないが、(コメンテーターとして)テレビに出演し、名前を知られている立場。僕の息子は『木村太郎の子供』ということで、周囲にからかわれるなど嫌な思いをしたと聞いている。さらに、孫にも『木村太郎の孫であることをできるだけ知られないようにしていた』と言われたことがある。それを聞いて、自分の存在が子供や孫の人生を左右してしまっていることを痛感した。しかし、それは変えようのない事実でもあり、家族とずっと共有していかなければならない悩みでもあると思う。そうした経験からも、成人した子供に対しても、責任は自分にあると考えている」

――親子で同じ仕事をしている場合は、特に事件への注目が集まりがちだ

「親子で同じ道へ進んだ場合、どうしても『二世』や『親のコネ』などという目で見られる。それは当人たちにとっては辛いことだと思う。ただ、著名人の子や孫として生まれることは、決して不利なことばかりではないはずだ。仕事の面で有利に働くことはありえるし、それは芸能界に限ったことではないだろう。ただ、親に影響力があるがゆえに、子供の進路の選択肢が広がり、それが良くも転べば、悪くも転びうることは、親も覚悟しておかなければならないだろう」

――親の責任を過度に追及する風潮が広がると、「子育てのハードルを上げることになる」などと批判的な意見もある

「確かに、『20歳を過ぎたら子供自身の責任』と言えれば楽だし、法律的にはその通りだろう。ただ、子を持つ親の心情としては、そうは言い切れない。高畑淳子さん自身は記者会見を開き、誠意を尽くされたと思う。ニュースを見て、私も妻と『(淳子さんは)辛いだろうけれど、親は責任を受け止めなければいけないものなのだろう』と話し合った。高畑さん親子の場合、芸能人家族だからこそ注目された側面が強く、必ずしも普通の家庭や子育てに一般化して議論すべきではない。著名人の場合、メディアの前での説明も、親に与えられた務めだと考える」

〈きむら・たろう〉昭和13年、米国生まれ。78歳。慶応大法学部卒。NHKの海外特派員やキャスターを経て63年、フリーに転身。現在、フジテレビ系「Mr.サンデー」などでコメンテーターを務めている。



親に法的な責任はない 弁護士・大沢孝征氏

――親には成人した子供に対する責任があるか

「原則として、成人した子供の犯罪や不法行為について、親が法的責任を問われることはない。子供が未成年者の場合、監督する親への損害賠償などの形で民事上の責任を問われることはあるが、子供が14歳未満の場合がほとんどだ」

――芸能人の場合、成人した子供の事件でも謝罪をするケースが多い

「親に法的には『責任がない』としても、世の中が納得しないという文化的、歴史的背景があるのだろう。現にそれは、実際の裁判でも無視できない側面だ。例えば、独身の成人が事件を起こした場合、親が情状証人として出廷し、更生への責任を証言することは多い。法的責任はないものの、親の道義的責任の果たし方が、裁判の一つの要素にはなりうる」

――親の責任を求める文化的、歴史的背景とは

「江戸時代の『忠臣蔵』では、大石内蔵助が討ち入り前、累が及ばないよう妻と離縁し、歌舞伎などでも描かれている。本人と家族は別人格ではなく、ともに責任を追及されることが当然とされており、その悲哀の物語が、共感を呼んだ理由の一つでもあったのだろう。また、『親の顔が見たい』『村八分』といった言葉もある。親は親、子は子という近代法が日本で取り入れられてからも、良くも悪くも、そうした文化が引き継がれてきたのではないか」

――親の責任を過度に追及する風潮には、社会や子育てなどへの悪影響も指摘されている

「そうした風潮につけ込んだ犯罪が振り込め詐欺ではないか。日本人の多くが持つであろう『内々に済ませたい』『表沙汰にはしたくない』という思いに加え、親の責任を果たすべきだという自己犠牲的な心情が、被害につながってしまっていると思う」

――著名人の関わった事件は社会的な注目を集める。一般人に対する影響をどうみるか

「著名人の起こした事件では、被害者も好奇の目で見られがちだ。特に性犯罪の場合、あることないことを探られて報じられ、被害者が二重三重の社会的打撃を受けてしまう恐れがある。被害者はそうした悪影響を避けたいと思うのが自然で、裁判を避けて示談するケースも多い。当事者にもメディアにも慎重な対応が求められる。そうした意味で、高畑裕太さんが不起訴、釈放された後、弁護人が『起訴されて裁判になっていれば、無罪主張をしたと思われた事件』といったコメントを出したことは異例だ。コメントがその後、さらにさまざまな憶測を呼んでしまったことは否定できず、弁護人の対応には疑問が残る」

〈おおさわ・たかゆき〉昭和20年、神奈川県生まれ。71歳。早稲田大法学部卒。検事を経て、54年に弁護士登録。得意分野は少年法や家事事件、犯罪被害者保護法など。被害者支援都民センター副理事長。

都市の介護不足は都市で解決を 田村明孝・高齢者住宅経営者連絡協議会事務局長

聞き手・立松真文

朝日新聞 2016年9月25日

介護の必要度が高い人にとって最期まで安心して暮らしやすいのは、特別養護老人ホームや認知症グループホーム、介護付き有料老人ホームなど介護のケアが手厚い施設です。しかし、決定的に不足しています。

近年は「サービス付き高齢者向け住宅」(サ高住)が急増しています。ただ、これはあくまでも住宅であって、施設とは異なり外部の介護サービスを使う必要があります。最近は入居者が集まらず、空き室率が高いサ高住も出てきています。

高齢者の住まい不足を背景に、日本創成会議は昨年、とりわけ高齢化が深刻な東京圏(東京、神奈川、千葉、埼玉)から地方への移住促進を提言しました。ただ、私はこのような考え方には懐疑的です。

高齢者は、できれば住み慣れたところで暮らし続けたいと思うでしょう。都会から移住する受け皿のため、新たに施設を造ろうという自治体はそんなにたくさん出てくるでしょうか。やはり、都市部の住まい不足は、都市部で解決していく必要があると思います。

施設や病院を造り続けることは難しく、国は在宅で医療や介護を受けられる体制づくりを進めています。ただ、そのサービスもまだまだ不足しています。一人暮らしで比較的介護の必要度が高くなると、在宅生活はかなり厳しく、その環境整備を進めるにはかなりのコストがかかります。



田村明孝さん

そこで私は、既存のインフラを活用していくしかない、と考えています。

たとえば「介護付き」ではない有料老人ホームやサ高住が、高齢者施設と同じように定額で包括的な介護サービスを受けられる「特定施設」の指定を受けやすくすることは一案です。特定施設の指定を受けたい事業者はたくさんいますが、行政が「総量規制」をしているため、増えていないのが現状です。

また、東京圏のサ高住は家賃が高くて入りにくいという人も多い。現在、国はサ高住の整備費に補助を出していますが、それは「造る側」のメリット。本当は利用者のメリットにつながらなければいけない。整備費への補助を切り替え、所得が低い人に家賃を補助することも考えられます。

見えない障害に手助けを 「ヘルプマーク」県が導入へ

中日新聞 2016年9月25日 岐阜

県が来年度導入するヘルプマーク

県は来年度、外見では障害者と分からない人たちが、手助けを必要とすることを知らせる「ヘルプマーク」を導入する。周囲に思いやりの行動を促し、「見えない障害」への理解を求める。県障害者施策推進協議会で方針を示した。

マークの利用者は主に内臓の機能障害や難病、人工関節や義足を使っている人など。自分の障害や必要な配慮が書き込み、かばんなどに付けて使う。電車やバスで席を譲ってもらったり、災害時に支援を受けたりできる効果を期待している。

マークは二〇一二年に東京都が作成。県によると、京都や和歌山など三府県が本年度中に導入するほか、青森や神奈川など四県も検討している。



県は今年、障害者関連の県内三十団体を窓口にして、マーク導入の可否を尋ねたところ、一万四千人から利用希望があった。県庁や市町村役場での無料配布を予定している。

(近藤統義)

移住先介護で一役 岡さん夫妻事業所開業

愛媛新聞 2016年9月25日

過疎化や少子化が進む愛媛県伊予市双海町翠地区に2年前、神奈川県から移住してきた岡孝彦さん(42)と貴恵さん(36)夫妻が今年1日、訪問介護の事業所を立ち上げた。事業所名はケアサポート「とにかく笑えれば」。「和気あいあい、にこやかに会話しながら介護がしたい。地域の人に選択肢ができれば」と張り切る夫妻に、住民もエールを送っている。

伊予市双海町に移住し、訪問介護の事業所を開業した岡孝彦さん(左)と貴恵さん夫妻=14日午後、伊予市双海町上灘



元お笑い芸人の孝彦さんは、お年寄りを笑わせたとい約15年前から介護の仕事に就き、移住前は訪問介護事業所で管理者を、貴恵さんはヘルパーをしていた。ただ、緊急事態があると24時間呼び出される生活。「家族とじっくり時間を取りたい」(孝彦さん)と移住を考えていた時に、インターネットで翠小学校の存続へ子育て世代の受け入れを応援していた翠地区を知り、2014年8月に長女の奏音さん(9)と長男の蒼汰君(7)を連れ移り住んだ。

移住後もそれぞれ介護関係の仕事をしていた2人だが「一人一人にあった細やかな介護をしたい」と開業を決意。16年2月に貴恵さんの両親も移住してきて子どもの面倒を見てもらえるようになったことも後押しした。

市双海地域事務所近くに拠点を設け、介護保険の訪問介護のほか、障害者の訪問介護や移動支援を手掛ける。孝彦さんは「駆け出しのヘルパーの頃、家にこもりがちのおばあちゃんが化粧して僕が来るのを楽しみに待っていてくれたことが原点。つらいときや悲しいときも笑ってもらえるようにさせられる仕事」と意欲をみせる。

将来は介護経験のある県外移住者の雇用も視野に入れており、「移住者なりの盛り上げ方もあり、一役買えれば」と見据える。

孝彦さんは集落の公民館長や翠小のPTA役員を務め地域行事の世話に忙しく、貴恵さんも翠小の広報部長として学校行事には足を運んで写真撮影にいそしむ。集落で唯一小学生がいる世帯で、登下校時に住民が出てきて声掛けしてくれたり、野菜を持たせてくれたり。貴恵さんは「子どもたちも地域の人にすごく大事にされている。子どもが来て明るくなると言ってもらえる」とほほ笑む。

地元の亀岡幹児広報区長(62)は「住民もみんな年をとり、需要も増えてくる。介護は地域に貢献もできる事業ですばらしい。地域に溶け込んで生活していく気持ちが伝わってくる。応援してあげたい」と見守っている。

きょうの潮流

しんぶん赤旗 2016年9月25日

NHK Eテレの「バリバラ」が注目されています。障害者のための情報バラエティーと銘打った番組。「障害者＝感動」の図式でいいのかと一石を投じました▼放送時間が8月恒例の日本テレビ「24時間テレビ」と重なり、これにぶつけて対抗したとも受け取られました。しかし、「バリバラ」が本当に問いかけたかったのは、「障害者をモノ扱いする社会のあり方」です▼NHKが障害者をどう取り上げてきたかも自己点検。1950年代の「かわいそう」から80年代の「けなげ」へ。“感動”が形成されていったことがわかります▼番組

は大阪放送局が制作。前身の「きらっといきる」を受けて2012年にスタートしました。障害のある視聴者からの「テレビの取り上げ方は画一的ではないですか」という声がかきかけでした▼一方の「24時間テレビ」は78年に放送開始。福祉や貧困、地球環境の問題にも迫りました。ちなみに井伏鱒二原作、森繁久弥主演の特集ドラマ「黒い雨」(83年)も記憶に残ります。スタッフは「取材すればするほど社会の矛盾が明らかになっていく」と語っていました。ところが、日本テレビは92年に「楽しんで感動する番組」への路線変更を宣言します▼政府批判につながりかねない面倒な放送は避けたい経営陣。今回の「バリバラ」の反響に神経をとがらせる動きがNHKの中にあります。障害を持つ人々が制作スタッフと交流する中で生まれた番組。時に笑い飛ばし、時に考えさせる、その志が続くことを願います。

障害者を円滑に避難させよ 取手で自然災害想定し訓練 産経新聞 2016年9月25日

地震、台風の自然災害などの際、障害者が円滑に避難できる態勢づくりに役立てようと、障害者支援団体などで行う「とりで障害者協働支援ネットワーク」が24日、障害者のための防災訓練を取手市寺田の福祉交流センターで開いた。

同ネットワークが平成25年に作成した防災マニュアルに沿い、車椅子を高層階から下ろす避難訓練を実演。4回目の今年は市内外から約120人が参加した。実演では、男性2人が車椅子の前後を押さえながら、階段を1段ずつ下りた。車椅子に乗った市社会福祉協議会職員の広瀬嘉子さん(46)は「怖さはほとんど感じなかった。階段を1段下りて大丈夫だと分かれば、不安は解消されると思う」と話した。

このほか、障害を持つ人を避難誘導する方法を描いた寸劇や、心肺蘇生法とAED(自動体外式除細動器)の模擬演習なども行われた。

障害者の余暇支援、毎月1回スポレク活動 大田原の福祉施設



下野新聞 2016年9月25日

【大田原】中田原の社会福祉法人エルム福祉会が運営する障害児(者)支援施設「スマイル」は、利用者の余暇を充実させようと毎月第4土曜日に旧蜂巢小体育館でスポーツ・レクリエーション(スポレク)を行っている。障害者スポーツの専門家の協力を得て、障害の重さなどに関係なく楽しめるプログラムを整えている。活動を地域に広げるため来年度以降、利用者以外の参加受け入れを目指す。

辻元(つじもと)るみ子(こ)施設長(63)によると施設の利用登録者は現在、児童60人、成人14人で障害の種類、重さはさまざま。利用者は家では閉じこもりがちという。

同施設は余暇の過ごし方として誰もができるスポレクを企画。同福祉会が本年度、市から旧蜂巢小を無償貸与され適地が確保できたため7月に活動を始めた。

指導は、辻元さんの旧知で県障がい者スポーツ指導者協議会の君島紀子(きみしまのりこ)那須ブロック長(51)＝那須塩原市下永田6丁目＝らが担当。6人対6人で対戦する卓球バレーやフライングディスクなどさまざまな競技を基にプログラムを作る。

3回目の24日は利用者31人が参加。卓球バレーを体験した目の不自由な横山明雄(よこやまあきお)さん(24)＝那須塩原市石林＝は「音でボールの動きが分かるので簡単にプレーできた。楽しかった」と笑顔で話した。

「スポーツで社会課題解決を」 為末氏が埼玉県議会で講演

産経新聞 2016年9月25日

陸上競技の元五輪選手、為末大氏（38）が23日、県議会で県議や市町村議会の議長らに向けて講演し、平成32年の東京五輪・パラリンピックに向けて「スポーツで社会のために何ができるかが重要だ。大会以降に日本が抱える高齢化や空き家問題などの課題解決に向け、スポーツ側からアプローチして役に立ちたい」と訴えた。

為末氏は講演で、英国ではロンドン大会を経て、障害者への意識が変わったと指摘。自身が取り組む競技用義足の開発プロジェクトを紹介し「東京五輪を境に障害を持った人が街に出歩くようになるなどして、社会のデザインが変わる可能性がある。そのきっかけを作りたい」と強調した。

為末氏は、寄居町が東京五輪の事前合宿誘致を目指すブータンのオリンピック委員会で、スポーツ親善大使を務めている。同町を視察した同国王子が「ブータンにそっくりだ」と連呼していたというエピソードを明かし、「人と人がつながる財産は大きい。ブータンと町の交流が生まれるといいなと考えている」と述べた。

障害者アスリートに歯科検診 SONが実施、歯磨き指導も

山陽新聞 2016年9月24日

口腔（こうくう）ケアで健康増進を図ろうと、知的障害者にスポーツの機会を提供するスペシャルオリンピックス日本（SON）の岡山県組織「SON岡山」は24日、岡山市内で、所属する障害者アスリートを対象に歯科検診をした。

参加者の口内をチェックする歯科医師（右）

選手たちの生活の質向上を狙いにSONが推奨するプログラムの一つ。県歯科医師会、県歯科衛生士会の協力を得て初めて実施。陸上やバドミントン、テニスなどに取り組む15～40歳の約40人が受診した。

歯科医師10人が参加者の口内をライトで照らしながら虫歯や欠損歯の有無、歯周病などをチェック。歯科衛生士による歯磨き指導もあり、参加者は適切な口内の手入れに理解を深めた。

磨き残しの傾向を指摘された陸上の男性（20）＝岡山市北区＝は「これからは優しく、丁寧に歯を磨きたい」と話した。

検診に先立ってセミナーもあり、江草正彦岡山大病院スペシャルニーズ歯科センター長（障害者歯科学）が口腔ケアの重要性などを説明した。



障害者スポーツ漫画募る

読売新聞 2016年09月25日

「Be The HERO」で人気マンガ家が手がけたイラストと選手たち。

日本代表との「共演」でPRを図る＝東京都提供
障害者スポーツを漫画で描く意義などを話す窪之内さん（右）（左京区で）

◇次世代マンガ家コンテスト、部門創設

日本が世界に誇る「マン



ガ」の力で、障害者スポーツの普及を図る。そんな取り組みがスタートした。業界を挙げて次世代のマンガ家を育成する応募型コンテスト「デジタルマンガ キャンパス・マッチ」実行委員会（委員長＝中村伊知哉・慶応大教授）が、今年初めて障害者スポーツ部門を創設。2020年パラリンピック東京大会に向け、マンガ文化の振興に力を入れている京都市で記者会見が開かれ、狙いが発信された。（菊池真司）

創設発表の記者会見は18日、西日本最大級のマンガ・アニメの総合見本市「京都国際マンガ・アニメフェア（京まふ）」の開催に合わせて、みやこめっせ（左京区）で行われた。東京大会を4年後に控え、PRにマンガが持つ影響力を最大限に生かすことが目的だ。

大会開催地の東京都は今春、サッカーマンガ「キャプテン翼」の作者・高橋陽一さんら人気作家5人に依頼し、障害者スポーツの選手をイラスト化。このキャラクターと日本代表選手を使った動画で普及を図るプロジェクト「Be The HERO」を展開している。今年で3回目を迎える同マッチの実行委はこのプロジェクトに賛同し、従来の「キャラクター」「イラスト」などの各部門に加え、障害者スポーツを題材とした「Be The HERO」部門を新設した。

コンテストでは、車いすテニスやゴールボール、車いすラグビーなど22種目をテーマにしたストーリーやイラストのほか、障害者と健常者が一緒に楽しめるオリジナルの競技を創造する作品なども募る。受賞作は発表や掲載の働きかけを通し、作品化やデビューの支援も行っていく。

記者会見には、東京都の「Be The HERO」で陸上選手のイラストを手がけた「ツルモク独身寮」の作者・窪之内英策さんが出席。窪之内さんは「障害者スポーツはまだ触れたことのない世界という意識があると思うが、マンガで紹介することで先入観を壊すアプローチになる」と期待を込めた。同部門の締め切りは12月24日。応募などの詳細は同マッチのホームページ（<http://www.digital-manga.jp/>）。

ストレス、耳の穴で測る 東洋大、医学と工学つなぐ研究 志村英司

朝日新聞 2016年9月25日

イヤホン状の外耳道内圧測定装置をつけて脈拍数を測定する寺田信幸教授。ノイズが入るので測定中は安静にする必要がある＝埼玉県川越市の東洋大理工学部



学 生 体 医 工 学 、 こ っ け い も	東京都市大 工学部	ベッドや風呂など日常生活の中でセンサーで心電図などを取る検査システムの開発
	大阪大 基礎工学部	耳にイヤホンをつけてインパルス信号の反響音を計測して個人を認証するシステムの構築
	明治大 理工学部	乳がんなどの早期検出を目指して日常的な画像診断ができる超小型MRIシステムの研究
	慶応大 理工学部	転移性の悪性腫瘍（がん）を超早期に検出する技術開発

目には見えないけれど、負荷がかかりすぎると、イライラや食欲不振、不眠など様々な症状が出るストレス。これを手軽に測ることができる機器が開発されました。着目したのは「耳の穴」です。実は、心拍数や体内の水分量などデータの宝庫なのです。

「耳栓と同じように装着すれば脈拍数が測定できます。音楽を聴きながらでもデータがとれます」。東洋大理工学部の寺田信幸教授が実演してくれた。携帯端末には脈拍数の波形が示される。

外耳道（がいじどう）内圧測定装置。外耳道とは、耳の穴の入り口から鼓膜までの空間のことで、イヤホン状のセンサーでふさいで、心臓や呼吸の状態を把握するものだ。すでに特許を取った。

社説：日本語と絵文字 伝わる文章力も磨こう 毎日新聞 2016年9月25日

電子メールが重要なコミュニケーションの手段になって久しい。

笑顔や泣き顔といった絵文字などの感情表現を、多くの人が気持ちを分かりやすく伝えるために使用している。文化庁が公表した2015年度「国語に関する世論調査」から、こんな日本人像が浮かび上がった。

今年2～3月、全国の16歳以上の男女を対象に実施された調査から、インターネットの利用の仕方や感情を表す表現を見てみよう。

ネットを利用する人は40代以下で97%以上にのぼり、利用の仕方ではメールが最も高かった。情報機器の普及が言葉遣いに影響すると思うという回答は85%以上あった。

絵文字を見たことがあるという回答は85・1%で、使うことがあるという回答は56・1%あった。(笑)(汗)などの表現を見たことがあるという回答は77・1%を数え、使うことがあるのは39・3%だった。

絵文字を用いる理由を聞いたところ、気持ちをより分かりやすく伝える、相手への親しさを表す、感情や気分などのニュアンスを加える、が上位を占めたのは注目される。

メールには、顔を合わせず時間をおいて意思疎通を図る特性がある。キーボードなどで打つ短文を「打ちことば」と呼ぶ専門家もいる。

日本大の田中ゆかり教授（日本語学）は、絵文字など記号類の多用について、欠落するニュアンスを補うだけでなく相手への配慮や自己演出の表現になっているとみる。絵文字を用いるという回答が女性に多いことから、女子の「かわいい文化」が先導役になっていると指摘する。

英オックスフォード辞典の「2015年を表す言葉」にうれし泣きの顔文字が選ばれた。絵文字が世界に広がっているということだ。

しかし、絵文字は万能ではない。

例えば笑う表現をとっても、日本語にはいくつもの単語がある。言葉の感覚を研ぎ澄まし、区別して使える単語を増やさなければ、ぴったりの言い回しはできない。微かな感情のひだを一つの絵文字で表すことはやはりできないだろう。

さらに、自分の考えや感情を正確に伝える日本語の力を養うことは思考力を深めることにもつながるはずだ。絵文字ばかりに頼ってはいは、そうした言葉の力は養えない。

今回の調査では、日本語を大切にしていると8割弱が回答した。地域や職場であいさつをし合うときなどに、多くの人が心と心を結ぶ言葉の大切さを感じることも分かった。

無料通信アプリ「LINE（ライン）」のスタンプをはじめ、絵文字は今も進化している。新しい文化を大事にしつつ、日本語の表現力を高めることも心がけたい。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行